

県内唯一、 樹冠20mのカシの屋敷林を掃除

～会員21名さわやかに楽しく～

4月15日（土）砺波市中野、水上孝志さん宅のカインヨ掃除を倶楽部例会として開いた。おだやかな好天に恵まれ、朝から集った21名の会員が精一杯ホウキや熊手を使って、去年の台風以来の落ち葉を集め、近くの田に運んだ。掃除をしたというさわやかな充足感を受け止め、ホウキや熊手の跡の見られる庭で、熱い豚汁を口にし、談笑・交流の一時を過ごした

* * *

水上さん宅の屋敷林の圧巻は、敷地中央部にウラジロガシが「主」となっており、枝は四方へ。その樹冠の下に立つとまるでふところに入ったような感じになる。勢いのあるこれだけのカシ大木は、県内の平野部では見られない。まさに県民の財産と言える偉容だ。参加した和田 健さんはこのカシの姿を取巻く樹木の配置を「まるで曼陀羅の世界だ」と表現、一同すっかり共鳴。



(写真：ウラジロガシの庭の全景)

■参加者の一言感想

N：ウメの花とカシの下の掃除は風情があり、とても気持ちよい

T：カシの枝ぶりに圧倒させられ、うれしくなった。

T：入ってすぐ「主」がいるなァと、おちつきを感じ、その下に立って、すっかり気が休まった。

T：ここで月見をしたい。

A：酒は向い（立山酒造）で、すぐ東の庄川のアユで、良いね。ウメ、ツバキ、クリがあるのも面白い。

O：カシは驚いた。イケにコイを入れたらどうか。

H：池の法に自然石を使ってあるのがよい。池は木にも良いし、防火用水でもあったのでは。灯籠も質素で心がしまる。

K：協力してこうしたカインヨを残していきたい。自然の摂理を感ずる。

S：時が止まっているような場だ。歴史の重みを次代へ残さねば。

W：カインヨ曼陀羅だ。九等分するとその真中にカシが座り、ヤブツバキ、サカキ、アカマツ、ヒノキ、スギ、タラヨウ、ウメとまわりに配置され、すごいものだ。金をかけた石もなく、シロウト積みだし、灯籠も手作りのようで気持ちよい。

K：こんな形のカシは、はじめてだ。中田（高岡市）の雲源寺のモミジを思い出してみた。

O：最近までの高度成長期の庭とは全くちがう重みがある。

Y：大変な重圧感を感じた。

K：大きい屋敷だし、掃除が大変だろう。

T：カシ一本で大自然の中にいるようだ。

N：公園かと思った。手の入っていないことがよい。

柏樹代表幹事は、カシの形や窓木の話し、成立している条件、下木にヤブコウジやカラタチバナが入るともっと安定するし、元気な屋敷林として自然の形で生きつづけるのではと説明。水上さん（おばあちゃん）から、日々のご苦勞の一端やお礼の言葉をいただき、参加者一同、沢山の感動を受け、カインヨ掃除を楽しく終えた。

そのあと、水上さんの上隣りにある尼寺跡の古い地蔵様の説明を会員の尾田武雄さんから聞いた。

(写真：手製のムシロ担架を使って) →



↑ (写真：質素な灯笼と池の石積み)



(写真：カシとウメの咲く下で) →

(写真：和田先生の講演
・かいによ苑の広間と座敷) →



「曼陀羅の中で暮す」独特のカイニョ論

～ 切りこみ明快な和田 健氏の提起～

2月25日(土)午後、かいによ苑(砺波市花園町)でカイニョ倶楽部主催の講演会を開いた。45名が参加し、講師の切りこみが鋭いカイニョ論に感銘を受けた。「カイニョの効用・めぐみ」の演題で和田 健氏(会員・元小矢部高校校長)の数十年間の森林・カイニョとかかわってきた体験を通じた講演。主に木と人との交流で心をつくることに焦点をあわせ、わかりやすい事証をもって沢山の示唆を与えた。

講演の要旨

- ・カイニョにまつわる作業や技術、認識の変わりよう――新しい「安曇野」構想等の発想も面白い(高岡市長の提案する)。
- ・人を呼び込む上でスギはなくてはならない存在。
- ・カイニョの生き方から人は学ばねば。
- ・百姓のさまがわりがよいことか――屋根に上れず、ハシゴにも上がれず、ノコギリを使えない人が多くなっている。
- ・少しだが、カイニョの愛着論が出てきたことは明るい話だ。
- ・カイニョの芸術――素朴なテーマの中から重厚さがにじむ。樹影の形・葉のゆらぎは、最たる芸術。
- ・外国旅行をしてカイニョの里を振り返る。
- ・「もったいない」、「ばちがあたる」等、まさにカイニョ人の発想。それが今、世界に通ずる。
- ・風や雪は最高の庭師ではないか。
- ・「もの」と「心」を「つなぐ」ことが大切――カイニョ 曼陀羅の世界観をもつ。それに囲まれて暮すことは、心身最良の環境だ。

平成18年 カイニョ倶楽部総会

5月27日(土)午後1時30分～4時 中島家(砺波チューリップ公園内)

- ・平成18年の活動を中心に話し合う